

泉の文化財



阿弥陀如来立像画



松森館跡

仙台市教育委員会

賀茂神社本殿と棟札(古内字札)

昭和39年 宮城県指定文化財(建造物)

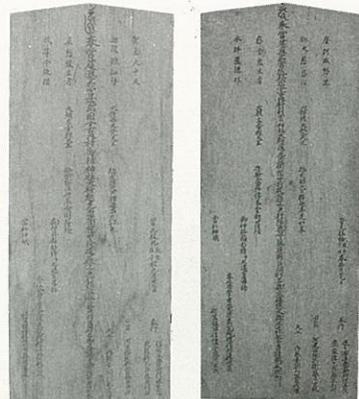


賀茂神社は、元禄時代に四代藩主綱村公が、塩釜神社を改築する際に、塩釜神社境内にあった只州宮(下賀茂神社)を現在地に遷宮し、更に同所に上賀茂神社を勧請して完成させたものである。

二社は、南面に並び建ち、向かって右側が下賀茂神社(御祖神社・東の宮とも称す)、左側が上賀茂神社(別雷神社・西の宮とも称す)である。

両社とも、茅葺き屋根の一箇社流造で、ともに三方に縁を巡らし、階段下に浜床を備え木部は丹塗、二軒繁垂木、軒支輪、出組の採用と同形式である。しかし彫刻の細部には相違が認められ、下賀茂神社の木鼻は龍、向拝の壘股が雌鶏、上賀茂神社の木鼻は象、向拝の壘股が雄鶏である。

両社殿の創建時の棟札によると、下賀茂神社は元禄9(1696)年に、上賀茂神社は元禄10年に大工内藤五左衛門藤原俊廣によって建てられたものである。また、両社は修理が繰り返され、それらの棟札も保存されている。



上賀茂神社の木鼻



下賀茂神社の木鼻

祭神は、下賀茂神社が玉依姫命、上賀茂神社が別雷神である。

鷲倉神社本殿(福岡字小山)

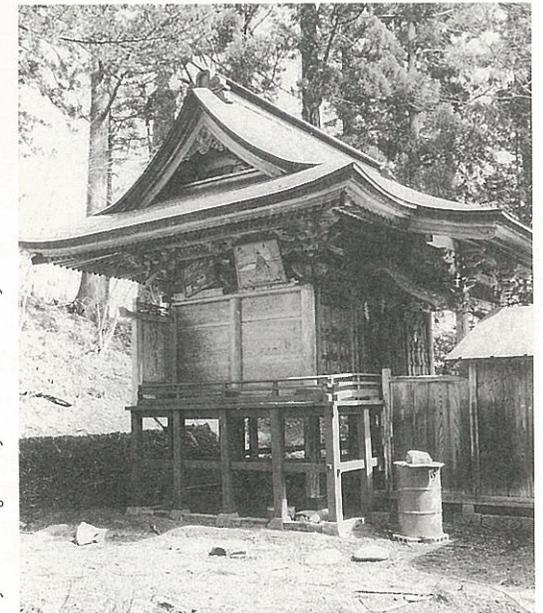
鷲倉神社本殿が鎮座する小山と屏風岳は、峰続きにあり、奇怪な山容を呈すこともあって古代から崇拜されてきた山であった。当初の社殿は、屏風岳の山頂に建てられたが、改築のたび東方へ下り、現在地に落ちついたと思われる。

同神社の棟札によると、慶長9(1604)年に社殿が造営されたとあり、現在の本殿は、明治14(1881)年に福岡村によって改築されたものである。本殿は、正面三間・側面二間の入母屋造で、正面には一間の向拝を伴う。

細部を見ると、軒は二軒の扇垂木、組物も尾垂木が入った二手先、向拝や軒下部分には動物や植物・波形などの彫刻が豊富で、全体としては豪華な本殿建築である。

改築時の棟札によると、大工棟梁は堂林の熊谷長吉、脇棟梁は柏房の相澤太左衛門で、いずれも地元の大工であったが、彫刻を担当したのは名取の彫刻師菅井幸四郎であった。

祭神は、大己貴命である。



細部彫刻

満興寺山門(根白石字町西上)



端正な造りであるのに対し、背面は豪快な丸太の骨組みをそのまま現わしている。

大桂山満興寺は、永徳2(1382)年岩手県永徳寺梅雪禅東の開山と伝えられる古刹の一つである。現在の本堂は、明治に造営されたものであるが、山門は、四代藩主綱村公の時代に建て替えられたとか、仙台城辰の口の御門を永安寺を経て移築したものと伝えられている。

この山門は、茅葺きから瓦葺きに改められるなど、当初の部材は桁や門柱だけになっている。正面と背面の外観が一変し、正面は角柱の上に冠木をのせるなど

旧熊谷家住宅(福岡字岳山)

昭和61年 仙台市指定文化財(建造物)

旧熊谷家住宅は根白石字銅谷屋敷に所在していたが、昭和60年11月に現在の場所に移築復原したものである。

主屋の土間側には別棟の廐が接して縦に配置されていたが、廐部分は移築前に解体された。建築年代を示す資料は発見されていないが、他の農家遺構と比較し19世紀前半と思われる。



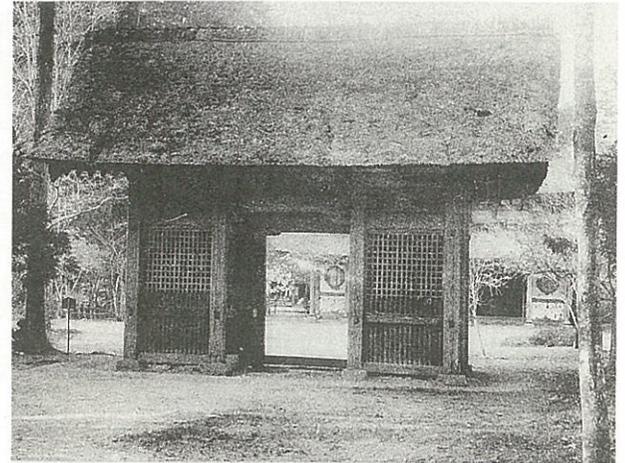
熊谷家は、安永の頃(18世紀後半)には根白石の肝入、幕末頃は銅谷山御林の山守を仰せつかった旧家である。

焼失前の山の寺洞雲寺(旧七北田字山の寺)

龍門山洞雲寺は、昭和18年の軽便鉄道の飛火による山火事によって、諸堂一切が焼失した。焼失前は、仏殿や開山堂・仁王門・山門・方丈庫裡などが整う大伽藍を有していた。これらの建築は、18世紀初期から末期にかけて北山輪王寺の桂菴禅師らの努力によって再興されたものである。

洞雲寺は、山々に囲まれた狭隘な土地に造営されたため、伽藍は起伏を生かしたもので、多くの禅宗寺院のような整然な配置はとられていなかった。

比較的小高い敷地に建てられたのが開山堂で、その前の階段を下った所に山門が建立された。山門は、洞雲寺の中でも最も特色ある建築で、翼廊の付いた塔状の二重門であった。上層の屋根は入母屋造りの茅葺きで、軒には二軒の扇垂木を採用し、下層は柿葺きで正面には軒唐破風を付していた。随所に動物や植物などの立体的な彫刻が施され、諸堂の中でも



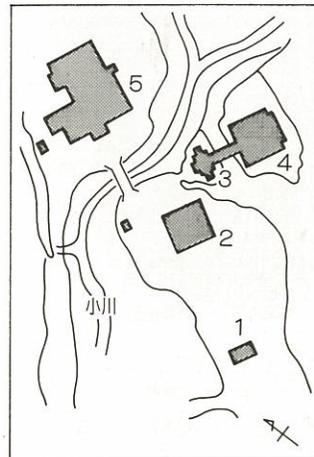
仁王門



山門

ひととき目立つ建築であった。

棟札の記録によると、山門の上棟は天明元(1781)年に行なわれ、大工棟梁は開山堂の大工棟梁と同じ鈴木喜惣右衛門永春であった。



1.仁王門 2.仏殿 3.山門 4.開山堂 5.方丈庫裡

阿弥陀如来立像画
(西田中字上田中)



来迎印を結ぶ阿弥陀如来の独尊立像である。

頭光から三本一組の光芒を48方に放ち、周縁には47のハルカ化仏を伴っている。48本の光芒は、阿弥陀の四十八願になぞられたものである。浄土真宗で本尊として祀られたもので、方便法身尊像と呼ばれる。大きさは縦120cm、横50cm程度である。製作年代は、南北朝時代から室町時代初期と考えられる。

木造阿弥陀如来立像
(福岡字阿弥陀前)

昭和40年 宮城県指定文化財(彫刻)

像の高さ98.8cm、桧材の寄木造で、玉眼を伴う。印相は、上品下生である。

快慶風の作りで鎌倉時代のものといわれている。

貞享2(1685)年、四代藩主綱村公が当地で発見したものである。



銅鐘(山の寺二丁目)

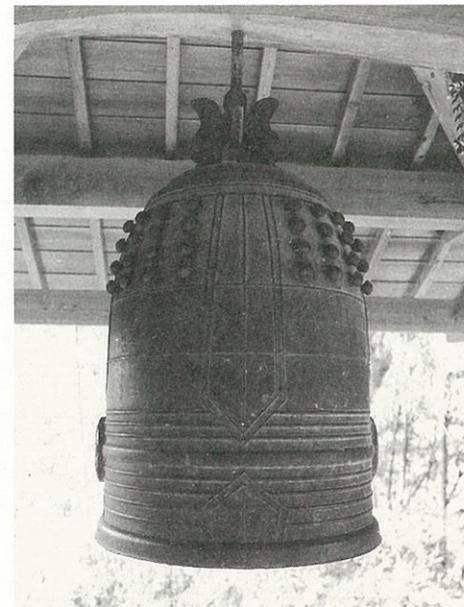
昭和37年 宮城県指定文化財(工芸品)

山の寺洞雲寺にある。龍頭・撞座の形式が良く整い、鑄上りも良好である。銘文を有す梵鐘では、県内最古のものである。

銘文には、「奥羽宮城郡大菅谷保 瀧門山洞雲禅寺常住 大工江家伯書守宗義 永正十五稔戊申呂上澣三日」とあり、永正15(1518)年、大工(工人)江家伯書守宗義の作であることが判る。

総長91.25cm、最大径56.2cm、龍頭高19.4cmである。

註:「羽」は州・「刃」は寅の異体字であり、「中呂」は四月のこと、「上澣」は上旬を意味する。



殿鐘(山の寺二丁目)



山の寺洞雲寺にある。

龍頭・撞座・駒の爪に裝飾が施され、池の間には桂菴の撰文により洞雲寺復興のいわれが陰刻されている。銘文には、

洞雲寺はたびたび荒廃を繰り返したが、第五代藩主吉村公の代に復興されたとある。

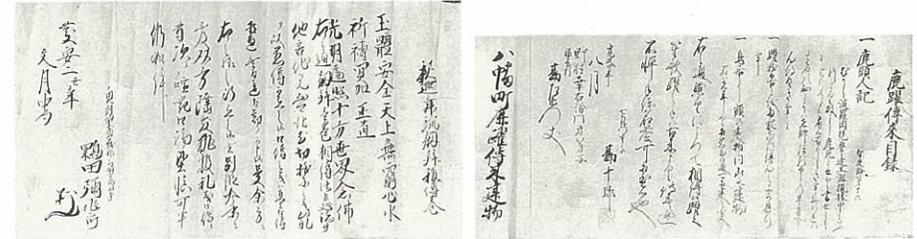
この殿鐘は、大立目源右衛門栄常が享保17(1732)年に寄進したもので、鑄工は早山四郎次喬である。

法量は、高さ60cm、経30cmである。



銅鐘の銘文

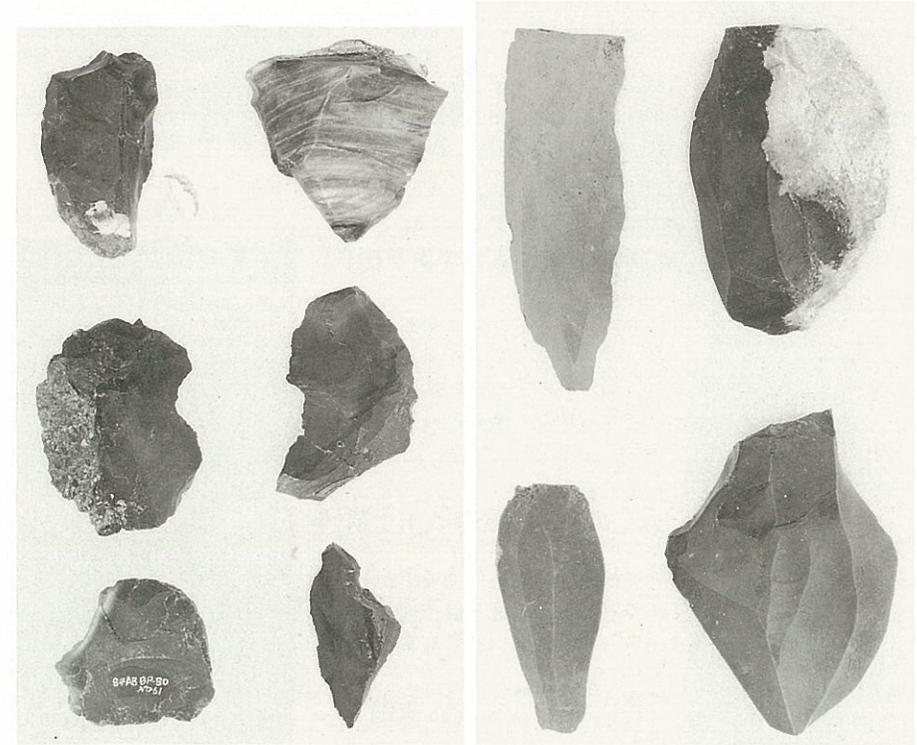
とぎた 鶴田家文書(福岡字中在家)



鶴田家には、地元へ伝承されてきた鹿踊や剣舞に関する文書が多数残されている。左の文書は、慶安2(1649)年のもので、「釈迦舞流剣舞祓伝巻」といって、剣舞や鹿踊の由来が記されている。右は「鹿踊伝来目録」で、寛政4(1792)年に福岡村勘左衛門丈に伝授されたことが判る。

住吉遺跡から出土した旧石器(仙台市教育委員会)

昭和60年に発掘調査を実施した結果、3万年以前の前期旧石器21点とそれ以後の後期旧石器約200点が出土した。これらの石器は、泉地域最古の人為的遺物である。



前期旧石器

後期旧石器

朴沢文書(東北大学文学部)

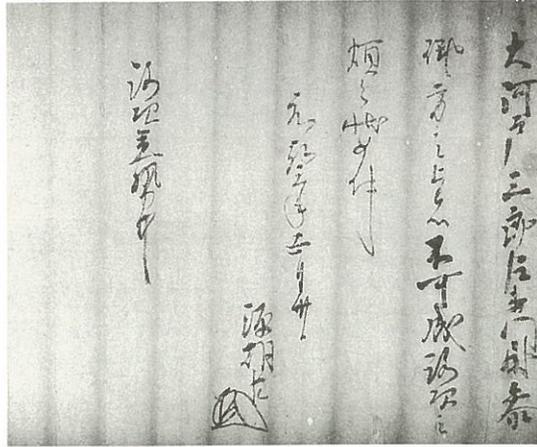
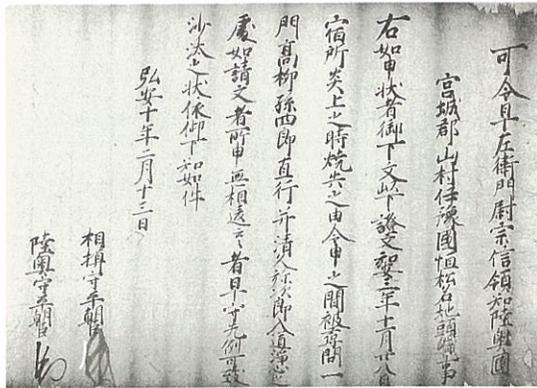
市内朴沢在住の朴沢基記家に伝わった16通の中世文書であり、現在は12通が東北大学文学部の所有となっている。

最も古いものは弘安10(1287)年の、関東下知状であり、明応5(1496)年までの文書である。

これらの文書により、中世の泉地方が「山村」と呼ばれ、また、南北朝時代には、当地方が南朝方の拠点であったことが判る。

弘安十年二月十三日関東下知状
相模守北條貞時陸奥守北條業時連署安堵状
可令早佐衛門尉宗信領二田庄奥國
右如申取者御下以下證文弘安三年十一月廿八日所
所炎上之時焼失之由令申之聞被三尋問二門高柳孫四
郎直行并時久彌次郎入道淨心之處如二請文者所申
無相違云云者早守三先例可致沙汰之状依仰下知
如件
弘安十年二月十三日
相模守平朝臣(花押)
陸奥守平朝臣(花押)

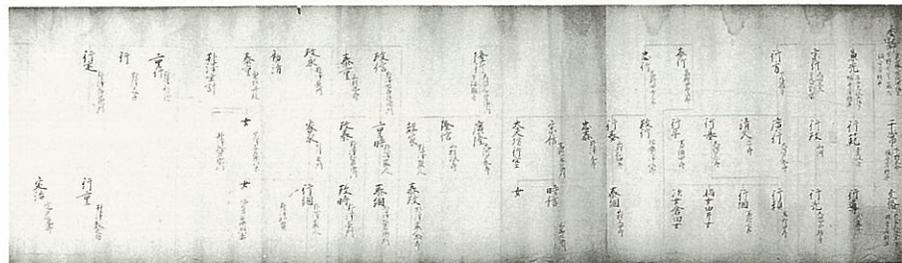
元弘三年五月卅日足利尊氏御教書
大河戸三郎左衛門尉參
御方之上者不可成路次之
煩之狀如件
元弘三年五月卅日
源 朝臣(花押)
路次軍勢中



朴沢系図(朴沢字西又)

朴沢文書を伝えた朴沢家の系図である。朴沢氏は、藤原秀郷の出自で、鎌倉時代に当地方の地頭職を得た大河戸行基の七代目、朴沢蔵人経家を初代とする。朴沢氏は、鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて、当地方に土着したものと思われる。

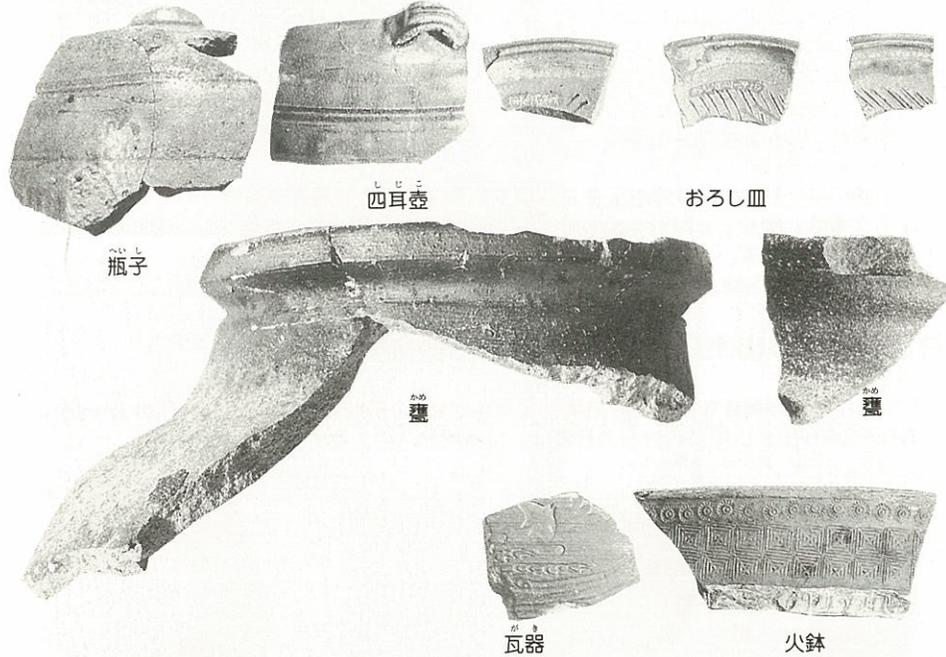
以後朴沢氏は、国分氏の家臣団に編成され、藩政期には伊達氏に出仕することになる。



長命館跡の出土品(仙台市教育委員会)

昭和60年の発掘調査によって出土した遺物である。瀬戸産の灰釉陶器のほか、常滑産の甕、中国産の青磁、火鉢等が多数出土した。

写真はいずれも戦国時代のものである。



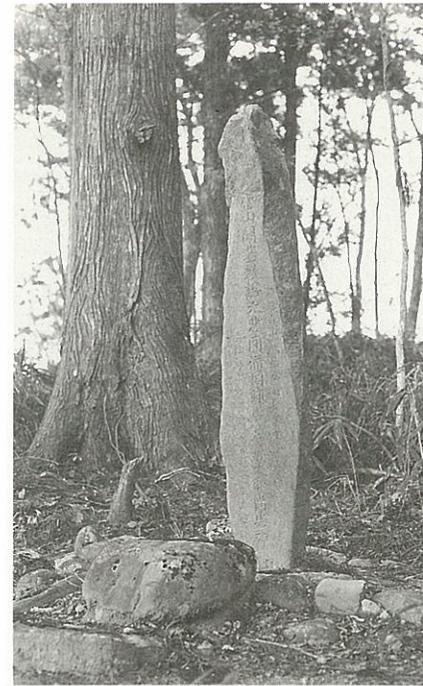
◀弘安の碑(根白石字君ヶ代)

泉地域最古の板碑である。種子(梵字)は、 (釈迦如来)で、弘安8(1285)年の年号が刻まれている。高さ1.15m、幅50cm、砂岩製である。

永仁の碑(七北田字大沢上前)▶

泉地域では、弘安の碑に次ぐ古い年号をもつ。種子は、 (大日如来)で永仁2(1294)年甲子の年号をもつ。

高さ1.12m、幅35cm、砂岩製である。



雲居和尚座禅堂跡の碑 ▲ (福岡字永安寺官林)

永安寺本殿の西側にある標高約370mの座禅堂山の山頂にある。

永安寺は二代藩主忠宗公の開基、雲居和尚の開山である。

雲居は、万治2(1659)年大梅寺において示寂したが、この碑は、享保2(1717)年関林祖禅が雲居の修行を後世に残すため建立したものである。

付近には、座禅堂の礎石が今も残っている。

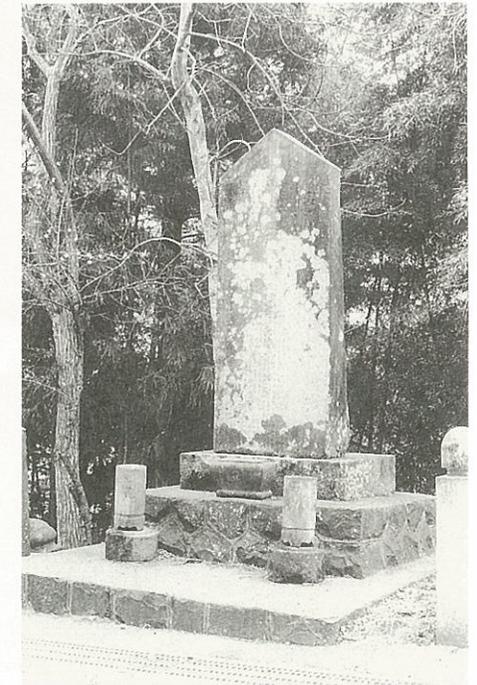
蔵経壇碑(小角字大満寺)▼

古内主膳重広の没後、夫人が延宝8(1680)年に建立したものである。

もとは、根白石の山中に築かれた壇の上に立っていたが、近年大満寺境内に移転した。

内藤以貫の撰文で、碑文には、重広の出自や重広が大阪の陣で活躍したこと、法華經一千部を納めたことが書かれている。

高さ2.23m、幅89cmの泉地域では最大級の碑である



《文化財調査一口メモ(1) 拓本のとり方》

石碑はながめるだけでなく拓本をとったりすると碑の性格、内容がわかり学習意欲が湧いてきます。拓本は練習しなければ上達しません。次の様な手順でとってみてください。

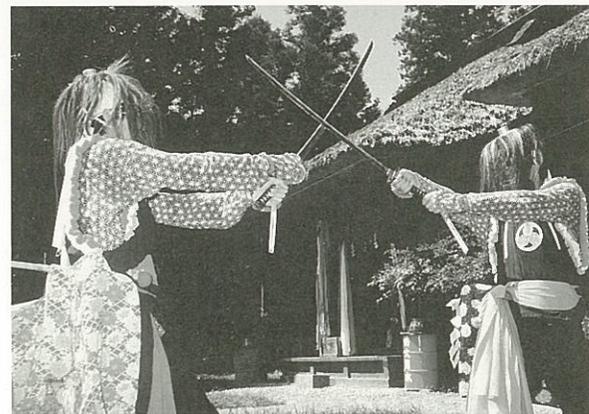
- ①市販の拓本用具を購入するか、参考書をもとに用具を作成して下さい。
- ②石碑の表面をブラシがハケで清掃し、ぬらした画仙紙をタオルで押しながらか張りつけて下さい。
- ③画仙紙が乾燥する直前にタンポでいいねいに墨打ちを行って下さい。
- ④打ち終わったら、新聞紙にくるんで持ち帰り、厚い本のおもしをかけシワをのばして完成です。

上谷刈鹿踊・剣舞(上谷刈字上の山) 昭和39年 仙台市指定文化財(無形民俗)



上谷刈
剣舞

上谷刈
鹿踊



剣舞は、釈迦流剣舞といって、悪魔退散・天下泰平を祈願するものである。扇の舞・剣の舞・和尚の舞などがあり、これらを舞うと1時間半を費す。

上谷刈鹿踊・剣舞は、幕末の頃一時途絶えたが、元治元(1864)年、福岡より新たに伝授され復活した。明治時代にも福岡から指導を受け、それ故に福岡を本家として敬意を表している。以後たびたび途絶えたが、昭和32年に現在の踊手たちによって再興された。

福岡鹿踊・剣舞は、伝授以来明治中頃まで続いてきた由緒あるものである。その後、上谷刈同様、衰退・復活を繰り返すが、昭和28年に復活した。昭和51年には福岡小学校児童に受け継がれている。

福岡鹿踊・剣舞
(福岡字中在家)
昭和39年
仙台市指定文化財
(無形民俗)



大沢田植踊(泉ヶ丘三丁目)
昭和62年 仙台市指定文化財
(無形民俗)

田植踊は、稲の豊作を予祝する正月行事として各地に伝承されてきた。

泉地域には、奴田植踊と弥十郎田植踊の二種類が伝わった。根白石上の宿・小角・実沢上の原・実沢去田組は奴田植踊、福岡藤沢・西田中・七北田大沢組は、弥十郎田植踊である。

特に大沢の弥十郎田植踊は、男子が早乙女に扮装して踊るもので、古雅を残している。

昭和に入り廃れ、戦後はほとんど途絶えたが大沢の青年会によって昭和56年に復活した。



福岡小学校児童による鹿踊



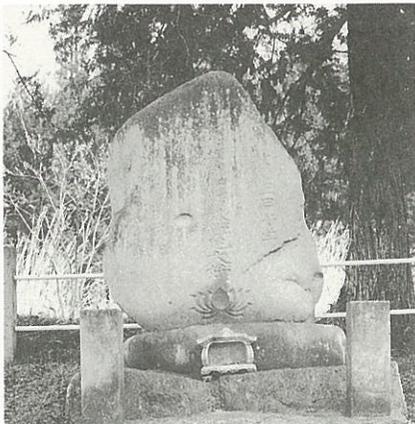
さいしゅういん
栽松院の墓(根白石字館下)
昭和43年 仙台市指定文化財(史跡)

白石城跡にある。栽松院は杉目御前ともいわれ、伊達晴宗の夫人で政宗の祖母に当る。

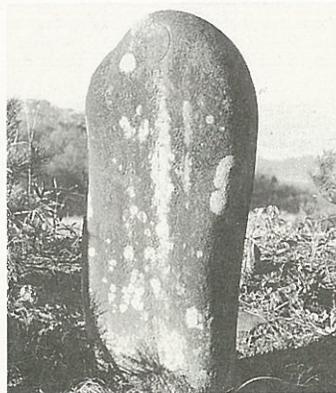
栽松院は晩年を根白石村で過ごし、文禄3(1594)年6月9日に他界した。

夫人の死後福島の琥珀山宝積寺の僧能山を招き寺を建て、同じく琥珀山宝積寺と称した。

墓石は、享保17(1732)年吉村公が立てたもので「栽松院殿月盛妙秋禅尼大姉」と刻まれている。



古内主膳の墓(小角字大満寺)



古内主膳は、名を平蔵と称し、国分盛重の第四子である。盛重没落の時は国分寺の坊中に隠れ難をのがれたといわれている。根白石に成長し、古内実綱の養子となった。藩祖政宗公の時、召され騎手となった。

文武両道にすぐれ儒学者の内藤以貫や雲居和尚と交わりがあった。万治元(1658)年二代藩主忠宗公が没すると殉死し、純忠の士といわれている。享年70才。

**寺坂吉右衛門の墓と碑
(市名坂字実相寺)**

実相寺境内にある。「理海慈宝主」と刻まれているのが、赤穂浪士の一人、寺坂吉右衛門信行の墓といわれている。

右どりの碑は、仙台藩の国学者保田光則の撰文により、宮下信教が天保14(1843)年に建てたものである。



たす
古内志摩の墓(古内字糺)



古内志摩は、名を義如(よしのり)といひ、初め治太夫と称した。三代藩主綱宗公に仕え、四代藩主綱村公の時家老となった。

寛文11(1671)年、大老酒井雅楽頭忠清邸で、伊達安芸と伊達式部の所領紛争の裁判を行っている時、原田甲斐が突然、安芸に斬りかかり、甲斐も柴田外記、志摩らによって斬殺された。いわゆる寛文事件である。柴田外記は重傷を受け亡くなったので、実情を知るのは志摩一人であったといわれている。

延宝元(1673)年、43才で没し、慈眼寺に葬られた。

内藤以貫の墓(住吉台東五丁目)

以貫は長州の生まれで通称六左衛門、閑斎、楽山、白石山人と号した。二代藩主忠宗公、三代藩主綱宗公に仕えた。

陽明学の流れをくむ儒学者で、『貞山公年譜』、『義山公年譜』を作成した。また、漢詩を得意として、弟子の須藤知平の編集による『閑斎詩集』として残されている。書道家としても著名で、中国の政治家李鴻章により絶賛されたという。

晩年は、この地に隠棲し、元禄5(1692)年68才で没した。墓は、白石山房といわれた住居のあった丘の中に造られ、土盛りをし、中央に自然石をすえた質素なものである。



りょうすけ
桜田良佐の墓(根白石字桐ヶ崎屋敷)

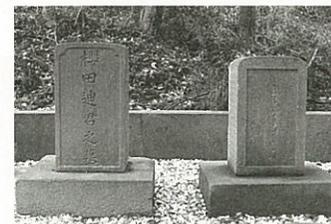
桜田良佐は、寛政9(1797)年仙台の生まれ、名を景迪と称し簡斎と号した。桜田欽斎から朱子学を学んだ後江戸に遊学、帰参後大番士となった。

30才をすぎ西洋砲術の研究に専念し、『大成流兵法新論』『大成流砲術新論』等を著わし、54才の時大成流兵学を創設した。後、認められて藩の洋式練兵所の指南役に任命された。

老年に入って、庄内出身の清川八郎と交友をもつと尊王思想に傾き、遠藤允信の上洛を成功させるなど藩内尊王派の指導的役割を果たすが、文久3(1863)年、藩批判の密書が露見されると志田郡松山茂庭邸に幽閉される。以後5年間執筆活動に専念する。

明治2~3年には政界に復帰し、尊王派の論功行賞や神仏分離の事業等を担当した。

74才にして根白石に隠居し、明治8年80才で没した。右は、夫人の墓である。



仙台藩刑場跡(七北田字念仏)



仙台藩の一般庶民の刑場であった。元禄年間から明治初年までこの地におかれた。

五代藩主吉村公の夫人長松院(久我貞子)の遺言により、延享3(1746)年に河南堂・河北堂の念仏堂が建立され受刑者の霊を弔った。

河南堂には「抜苦」、河北堂には「与楽」の額が掲げられ、現在山の寺洞雲寺には「抜苦」の額が保存されている。

跡地には、供養塔や地藏尊がまつられている。

堂庭廃寺宝塔跡(根白石字堂所山)



黒川郡との郡界付近の標高約240mの堂庭山山頂付近に立地している。

昭和43年に発掘調査を実施した結果、瓦積みの中から円形にまわる礎石が発見された。礎石が円形にまわることから、建築物は宝塔跡であることが明らかになった。

出土遺物の年代から、10世紀中頃に位置づけられ、多賀城の西域を守る鎮護の寺院と考えられている。

松森焔硝蔵跡(南光台東二丁目) 昭和62年 仙台市指定文化財(史跡)



仙台藩焔硝蔵(火薬貯蔵庫)の一つである。仙台藩の焔硝蔵は鷺ヶ森・砂押・越路などにもあったが現存しているものはここだけである。

この焔硝蔵は、元来3基あったが現在残っているのは1基だけである。昭和57年の発掘調査では、15尺×30尺の蔵跡と、それを囲む配水溝や石敷の通路、また、爆発孔が発見された。

慶応3(1867)年2月、藩主慶邦公が当地をおとずれている。

三十三所観音(根白石字館下)



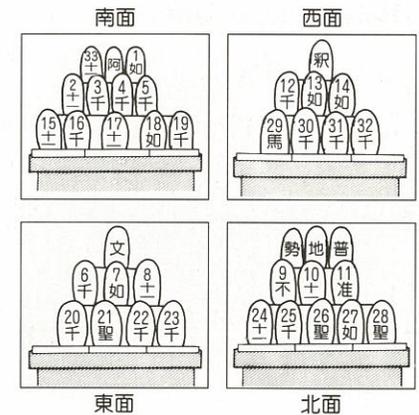
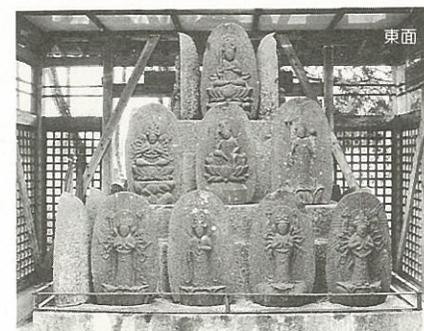
白石城跡平場内、裁松院の墓の東隣りにある。

西国三十三観音を安山岩製の石に浮彫りしたもので、一基ごとに札所番号や寺号・寄進者名等が刻まれている。最も多いものは、千手観音で、如意輪観音・十一面観音・不空縑索観音・准胝観音・馬頭観音がある。これらは、近年改築された堂の中に釈迦如来・阿弥陀如来・文珠菩薩・勢至菩薩・弥勒菩薩・地藏菩薩を加えピラミッド状に東西南北を向いて安置されている。

裁松院の供養、天明の飢饉における餓死者供養のために彫られたといわれてきたが、江戸時代中頃から流行した西国三十三所巡りを代用させる目的で19C前半につくられたものである。

法量は、ほとんど同一で高さ62cm、幅37cm程度である。

阿:阿弥陀 文:文珠 勢:勢至 地:地藏 普:普賢 釈:釈迦 十一:十一面観音 千:千手観音 如:如意輪観音 准:准胝観音 聖:聖観音 馬:馬頭観音 不:不空縑索観音



ミズバショウ(福岡字岳山)

昭和40年 仙台市指定文化財(天然記念物)

芳の平中央部の約5.6haほどの湿地帯に群生する。この様な広大な面積に群生する例は、県内では珍しい。

早春の花期には、湿地帯全体が純白に覆われる。



晩秋には美しく紅葉する。

泉地域には類例がなく貴重な樹木である。

樹齢 推定100年以上

西側の株 目通り幹囲 3.25m

樹高 約 16 m

枝張 東西13.5 m

南北21.4 m

東側の株 目通り幹囲 2.35m

樹高 約 16 m

枝張 東西17 m

南北19.5 m

アラカシ(古内字糺)

昭和60年 仙台市指定文化財(天然記念物)



賀茂神社本殿前庭の入口に東西1株づつある。右側の株は地際から1m位までは空洞になっている。

樹齢 200年以上

東側の株 根元幹囲 7 m 目通り幹囲 3.9m

樹高 12.5 m

枝張 東西 7.4 m 南北 10 m

西側の株 根元幹囲 2.9 m 目通り幹囲 1.6m

樹高 11.5 m

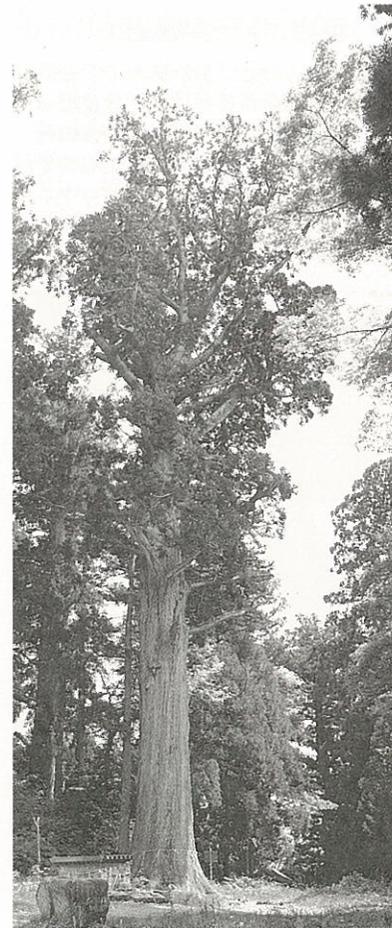
枝張 東西 5.95m 南北 7.9m



イロハモミジ (古内字糺)

昭和60年 仙台市指定文化財
(天然記念物)

賀茂神社の参道入口にある。植栽されたもので東西に2株並んでいる。両株とも樹勢がすこぶる旺盛で、



神杉(姥杉)^{うばすぎ}(福岡字小山)

昭和60年 仙台市指定文化財(天然記念物)

植栽されたもので、鷲倉神社境内の参道右側にある。樹幹が垂直に伸び、地上9mの部分より放射状に枝を張っている。幹には枯損したり中心部に空洞のようなものは見られず、樹勢はすこぶる旺盛である。

樹齢 推定400年以上

根元幹囲 11.9m 目通り幹囲 8.16m

樹高 36 m

枝張 東西16.8m 南北 20.2 m



タラヨウ(古内字糺)

昭和60年 仙台市指定文化財(天然記念物)

賀茂神社本殿前の左側にある。

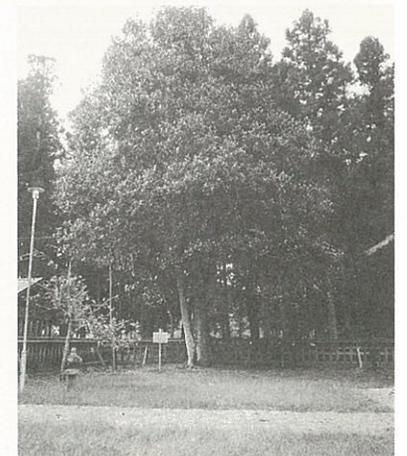
タラヨウは、静岡県以西の暖地に生育する種類であるが、植栽可能な北限地帯に、樹勢が旺盛で見事な大木に成長している例は極めて珍しい。

樹齢 推定100年以上

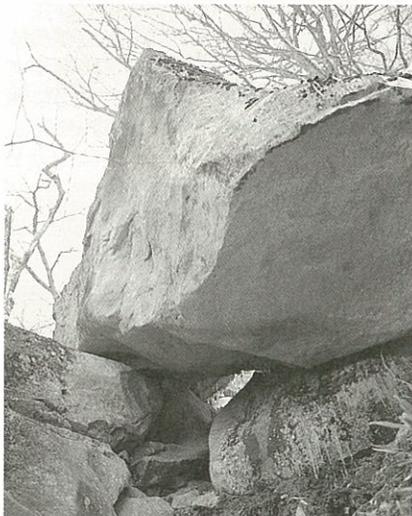
根元幹囲 3.4m 目通り幹囲 2.85m

樹高 17 m

枝張 東西9.6m 南北 11.85m



泉ヶ岳胎内くぐり(福岡字岳山)



泉ヶ岳頂上から見て、東南の標高約800mの急峻な登山道中にある。

巨大な岩石の重なりの中に、高さ4m程の巨石が二つ立ち、その上に長さ約7m、幅約2.5m、厚さ約3mの巨石が乗りかかっている。中央に人ひとりがやっとくぐり抜けられる隙間があり、胎内くぐりと呼ばれている。この巨石の面積は、畳10枚程で、登山者の休憩所として利用されている。

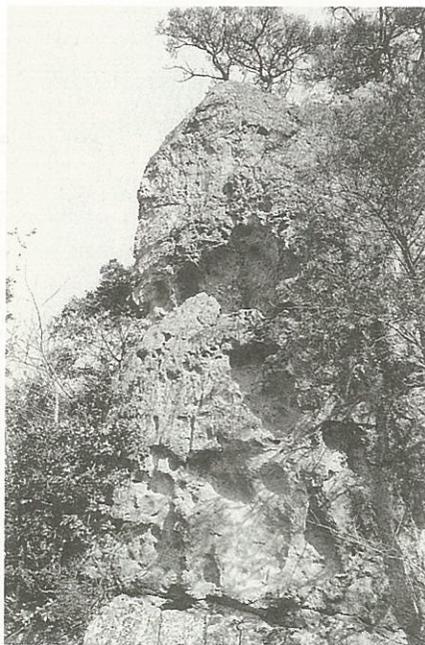
山岳信仰では胎内くぐりを通ると、道中無事だと説いている。



猿岩(朴沢字猿岩)

高さ10m程の直立に近い岩場で、向かって左側の崖面はいたるところ凹状になっている。凹状の地形は風雨による浸食の他、化学的風化作用により形成されたもので、雲形浸食と呼ばれている。

猿の遊び場の様に見えることから、猿岩と呼ばれている。



光明の滝(朴沢字一野々)

朴沢地区高野原から更に山間部へ入った地域にある。

北泉ヶ岳の東側に源流をいたたく長谷倉川は、深い谷を作り七北田川と合流する。

この滝は、安山岩の岩脈にかかる泉地域内随一の大滝で、落差約7m、滝つぼの径約12m、深さ約2mである。

安永3(1774)年の『風土記御用書出』に、「男瀧」・「女瀧」の記述があるが、このことと思われる。

杭城館跡(西田中字杭城山)

西田中の人里離れた丘陵にある。東西約860m、南北約400mの規模で、泉地域では最大の面積を有する館跡である。

『仙台領古城書立之覚』には、「城主は山内須藤刑部少輔という者である。実沢村の山野内城を結城七郎に責められ、この所へ落ちのびてきた。仮杭をさしぬきたてこもったので杭城と申し伝わっている」と記載されている。

杭城館跡にたてこもった須藤刑部は、天正12(1584)年福岡の首藤坂で討死したと伝えられている。



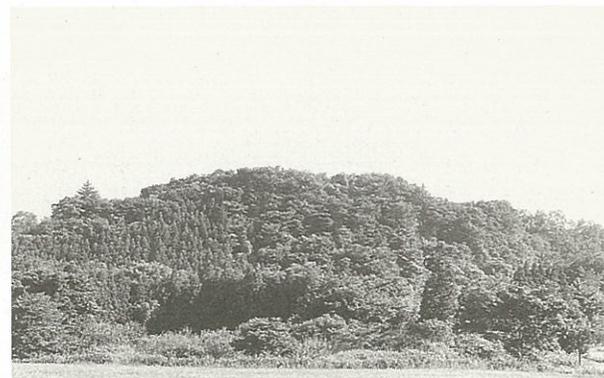
山野内館跡(実沢字六堂屋敷)

東西約250m、南北約150mの規模で、北端は七北田川によって侵食された崖面となっている。

『仙台領古城書立之覚』には、「城主は山内須藤刑部少輔という者である。永禄年中まで居住したと伝わっている。山内須藤という者は相模国の山内家の子孫である」と述べられている。

別名、山内館・野村城・山村古館などと呼ばれることがある。

南北朝時代の古文書にしばしば登場する「山村城」の擬定地とする考え方もある。



《文化財調査 一口メモ(2) 中世城郭の調査》

中世城郭は一般的に館跡と呼ばれています。調査に出かける時のポイントは……。

- ①できるだけ、草木の繁茂しない時期を選ぶこと。初冬～早春。
- ②1/25,000の地形図を持ち歩き、正確な位置を把握する。
- ③館跡の内部へ入ったら、土塁や空堀等の遺構に注意し、簡単な略図を作成する。
- ④一眼レフカメラを用い遠景写真や遺構の細部写真を撮影する。
- ⑤遺物の採集につとめる。遺物は専門家にみてもらう。

白石城跡(根白石字館下)



東西約150m、南北約100mの規模で河岸段丘を利用した平城である。

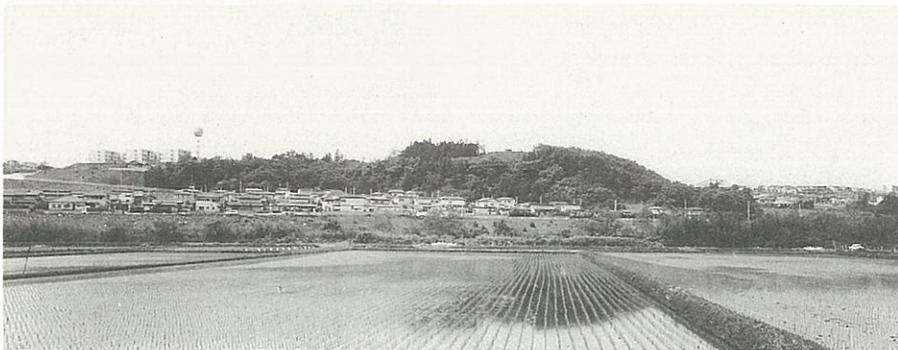
北側から西側にかけては、長さ約120mにわたって土塁と空堀が残っている。

『仙台領古城書立之覚』には、「城主は白石三河という者で

ある。今では子孫の白石勘之助が住んでいる」とある。

白石氏は、戦国時代に国分氏の家臣に編成される小領主である。

長命館跡(加茂二丁目)



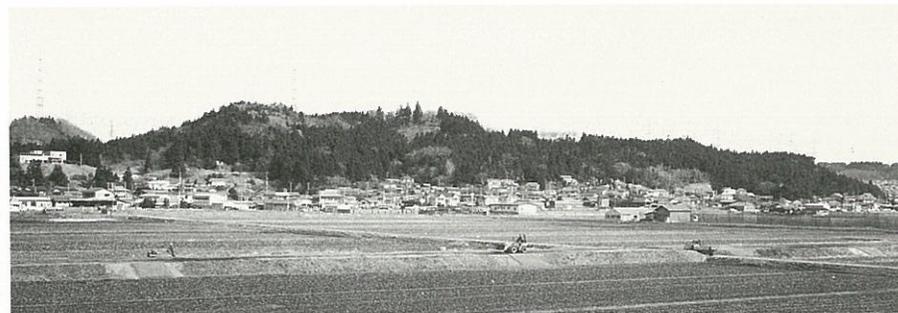
東西約250m、南北約350mの規模をもつ山城である。

遺跡内には三ヶ所に大規模な平場が築かれ、堀切・土塁・井戸跡等も残っている。

江戸時代以来、吾妻鏡文治五年八月十四日の条の記事にみえる「国府中山上物見岡」の跡として伝わってきた。

昭和60年の発掘調査の結果、13～15世紀の遺物が出土し、平安末から鎌倉時代の初めまではさかのぼらないことが明らかになった。

戦国時代には、国分氏の家臣である長命氏が館主であったと推定される。



松森館跡(松森字内町)

東西約600m、南北約350mの規模で泉地域では杭城に次ぐ広大な面積を有す。

最も標高の高い地点の平場は、約3500㎡を有し、ほとんど平坦に整形・整地されている。遺跡内では、いたるところに堀切や段が築かれている。

『仙台領古城書立之覚』には、「城主は国分彦九郎盛重で小泉から移ってきた。天正年中まで居住した」とある。国分盛重は伊達政宗の叔父にあたる。

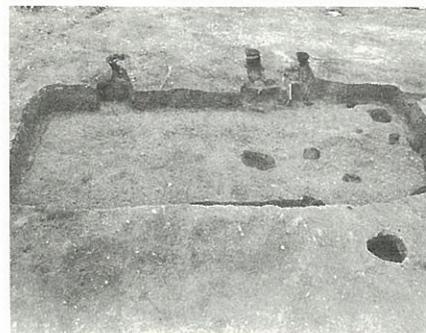
国分氏は、この館跡を根拠としてしばしば、岩切城主の留守氏と戦ったが、慶長元(1596)年に没落した。



ながくき 長嶋遺跡から発見された住居跡

長嶋遺跡からは、縄文時代の竪穴住居跡2軒、古代の住居跡が4軒発見された。

下の写真は、いずれも古代の竪穴住居跡である。左は、7.5×3.5mの規模を有し3基のカマドを伴っている。



赤生津遺跡の水田跡(七北田字赤生津)

昭和63年度の調査によって、現在の水田面の下から平安時代の水田跡が検出された。この水田跡は、10世紀前半に降下した火山灰によって覆われ、廃棄されたものである。



不規則な線がアゼ

高柳遺跡の遺物包含層(七北田字高柳)

平成元年度の調査で縄文時代中頃(約4,500年前)の遺物包含層が発見された。約1,000箱におよぶ土器の外、土笛や土偶も出土した。



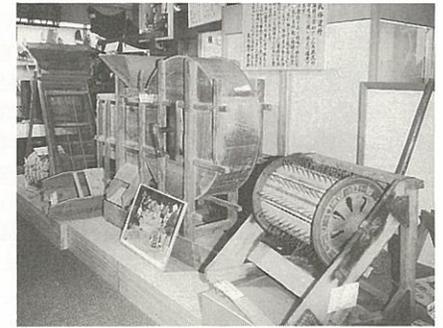
発掘風景

泉民俗資料館(市名坂字東裏)

泉民俗資料館は、失われていく民俗文化財を収蔵・展示する目的で、昭和53年に設置されました。

ここでは、約800点の資料が展示されている。

衣・食・住に関するもののほか、農耕・杣樵・漁撈・養蚕・整系などに関するものがある。



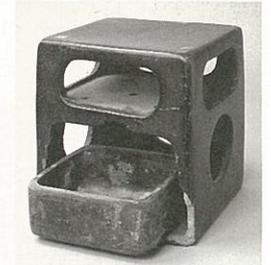
展示品の一部



ハンテン



石臼



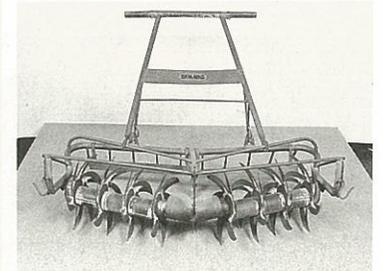
アンカ



ドウ



カマダガミ



馬耕具



山の寺伝説

約1,300年前、この地方は土地の肥沃なところで、大菅谷・佐賀野という常に5~600年も前のことを話す異人の夫婦が住んでいた。

ここに、僧定恵が寺を建立したいと夫婦にたのみ円通寺という寺を建てた。その後、荒廃したが、弘仁年間に入り、慈覚大師がこの寺を中興し、山の寺と呼ぶことになった。

天長年間に入り、寺の近くに住んでいた長者の妻と美童が愛しあう様になったが、男女は、一緒になれないことを恨み池に身を投げてしまった。怨念は、二人を大蛇に化え、近づくと人々をおそったので寺は再び荒廃した。

暦応元年、この地を訪れた明峰素哲禪師が寺を再興すべく、池のほとりて座禅をはじめ17日目についに大蛇を追い払い新たに龍門山洞雲寺を建てた。しかし、禪師がいなくなると再び廃寺になってしまった。

その後、応永7年に梅国祥三禪師が洞窟で座禅をしていると若い男女が訪ねてきた。禪師が二人の話をおきくと、天長年間に池に身を投げ大蛇となって苦しんでいる者達であることが判り、法力で救ってあげた。二人は大変喜んで牙と鱗を献上して天に昇っていった。

山の寺洞雲寺の再興伝説で、延享元(1744)年に建立された碑に格調高い漢文で刻まれている。

白藤観音伝説

小角にある白藤観音堂境内にある白藤にまつわる伝説である。

坂上田村麻呂が東征の時(七ツ森の巻狩ともいわれる)、愛馬太白号が毒を食してたおれ



てしまった。里人は、この地に堂を建て馬の霊を弔った。白藤は、その時、將軍が鞭に用いていたもので、成長して大木になったといわれている。

この藤は、婦人の病気に特効があるといわれ、持ち去る者が多く明治の中頃枯れてしまい、現在のもは後世に植えかえられたものである。

堂内には石製の観音がまつられている。



万人淵伝説

万人淵は、山野内館跡の北側、七北田川右岸にある。

山野内館が結城七郎に攻められ、落城した時、須藤刑部の一族がこの淵に身を投じたといわれている。常に、水面に水泡が絶えないのは、怨念がいまでも残っているためといわれている。

この水泡は、天然の炭酸水である。

いしどめ

石留明神伝説

石留明神は市名坂字石止、七北田川の左岸にある。

神世のころ、冠川神社の志波彦神が白馬にのり、七北田川を渡ろうとしたところ、馬が川底の石につまづき落馬し冠を流してしまった。神は大いに恐り、これより下流に石があってはならないと家来の神々に命じて、石を両岸に拾い上げさせた。これ以来、下流には石がないという。

また、沼田備前なる者が、ある時七北田川をさかのぼっていく石をみつけ拾い上げ、これを御神体として祀ったという伝説もある。

石留明神社は、御霊明神とも呼ばれ、御神体は直径30cm程度の礫である。



金玉塚伝説

金玉塚は大沢大ケ沢の丘陵中にある。ここには五輪塔が立ち、以前から座頭神様あるいは金玉塚と呼ばれている。

昔、南部の国の盲人金玉が座頭の位を得るため、多額の金を用意して京へのぼる途中、大沢の山道にさしかかった。ここに、甚八という盗族がいて彼をおそった。金玉は必死になって、「今殺されるのは悪縁とあきらめるが、名前をきかせてくれ」と頼んだ。金玉の郷里ではいつまでも彼が帰らないので弟子が探しにきた。たまたま大沢の宿で、こねたまだいたくさん「金玉大沢山に殺害す主は鈴木甚八」という経文を聞き、その謎がとけ役人に訴えた。甚八は捕えられ七北田刑場で処刑されたという。



狼石(三峰山碑)伝説

狼石と呼ばれる碑は、現在実沢字戸平に立っているが、もとは山野内館跡の西南、実沢字早坂下にあった。

石には、「天保十二歳 三峰山 四月朔日」と刻まれている。

実沢村の百姓が馬を引いて城下から帰る途中、ノドに骨を刺して苦しんでいる狼をみつけた。百姓があわれに思いこれをとってやると、大変に喜んで山中に姿を消した。その晩、百姓の庭先でドスンという音がしたので翌朝みみると、一頭の猪がおいてあった。それからは、百姓が城下から帰る途中、中山峠で出迎え、自宅近くまで送るようになった。百姓も昼のにぎり飯を二つ用意し、一つは残して別れることが繰り返された。後年、百姓がなくなった時、狼の遠吠えが何日も続いたという。

石は、高さ70cm、幅42cmの自然石で狼を神の眷属として信仰する三峰信仰の碑である。天保12(1841)年には泉地域にも三峰講が組織されていたことを示す資料である。



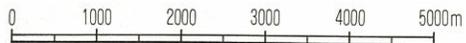
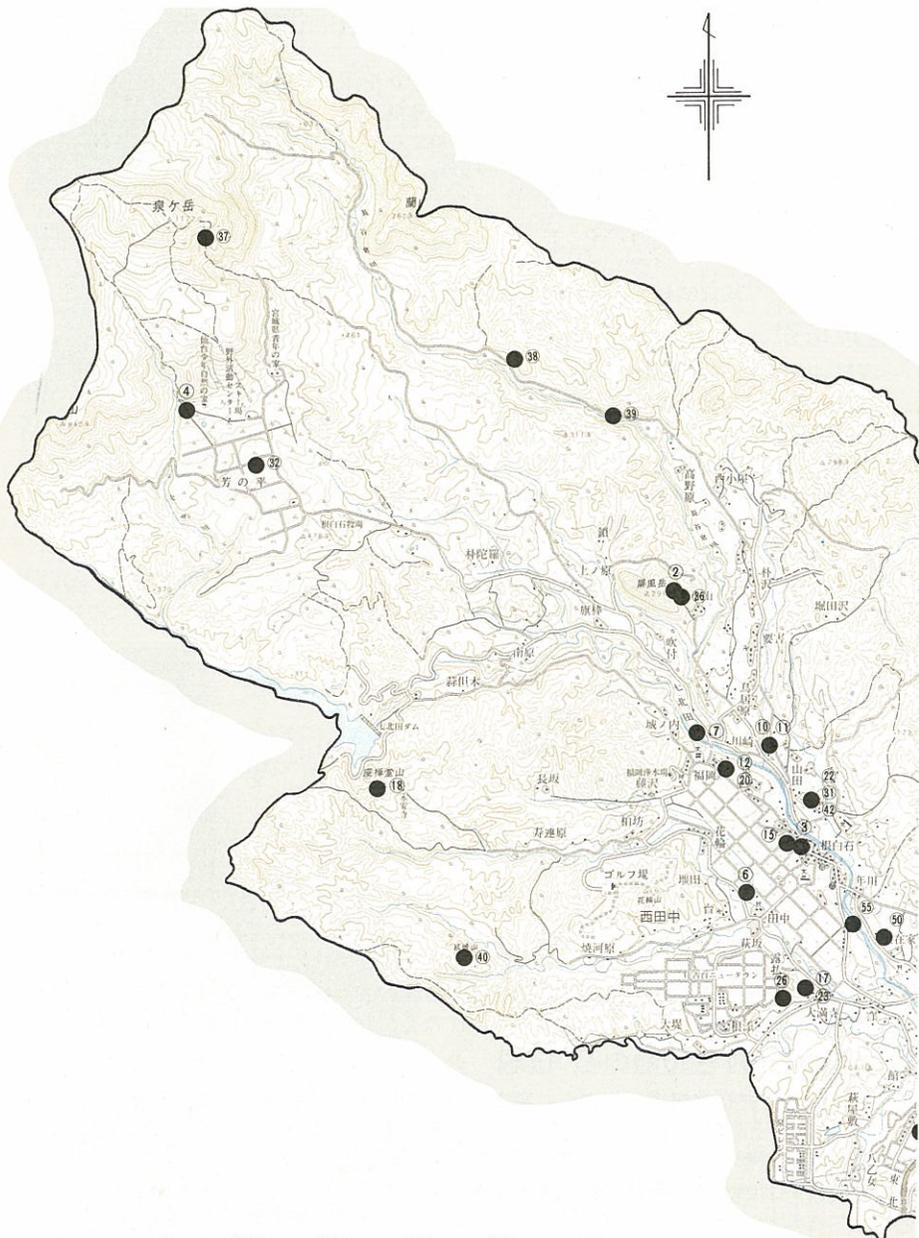
根白石の石(村名起源の石)伝説

この石は、根白石字福沢下にある。高さ32cm、幅22cmの小規模なもので、「享保十三戌 石神 九月十九日」と彫られている。

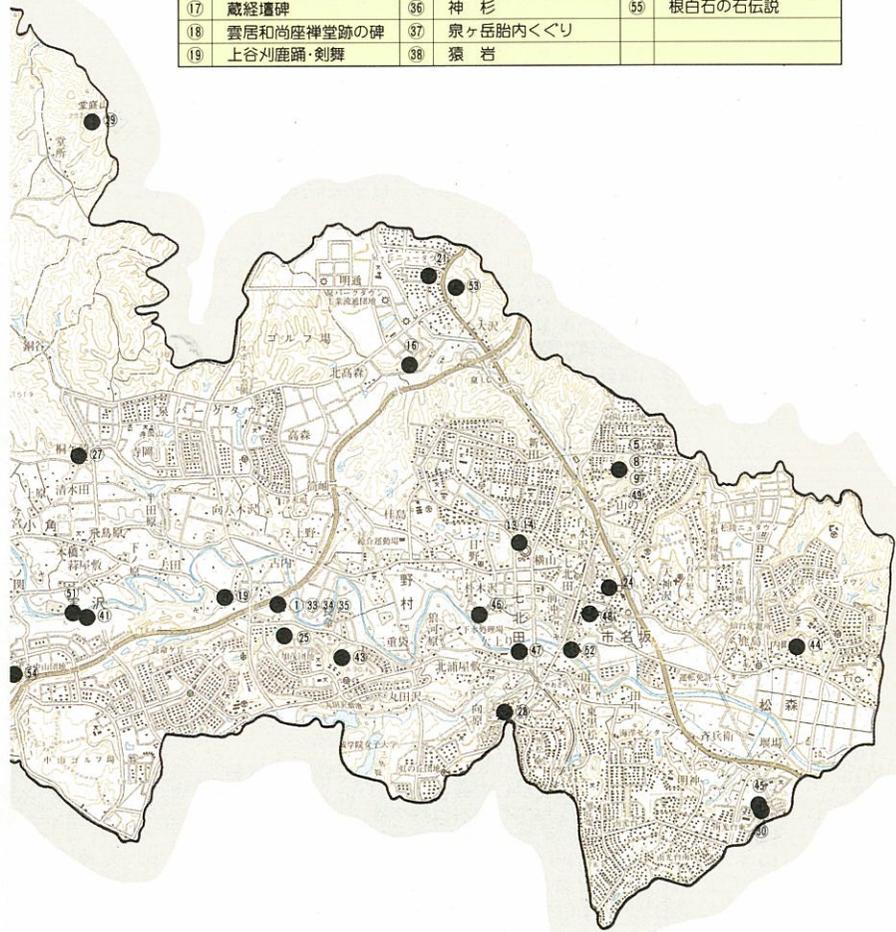
源頼朝が奥州合戦の帰りに、七ツ森で巻狩りを行った。この時、一頭の大鹿をみつけ、和田義盛・畠山重忠が矢を射たが動かなかった。近よってみると、鹿ではなく根元の白い石であった。以後、頼朝はこの地を根白石と呼ばせたという。

白い石は、村人が石神として祀っていたが、たび重なる川の氾濫でうずもれてしまった。そこで、村名の起源を後世に残すため、享保13(1728)年に新たに造作したものである。





① 賀茂神社本殿と棟札	②0 福岡鹿踊・剣舞	③9 光明の滝
② 霧倉神社本殿	②1 大沢田植踊	④0 杭城館跡
③ 鴻興寺山門	②2 栽松院の基	④1 山野内館跡
④ 旧熊谷家住宅	②3 古内主膳の墓	④2 白石城跡
⑤ 焼失前の山の寺洞雲寺	②4 寺坂吉右衛門の墓と碑	④3 長命館跡
⑥ 阿弥陀如来立像画	②5 古内志摩の墓	④4 松森館跡
⑦ 木造阿弥陀如来立像	②6 内藤以貫の墓	④5 長嶋遺跡
⑧ 銅 鐘	②7 桜田良佐の墓	④6 赤生津遺跡
⑨ 殿 鐘	②8 仙台藩刑場跡	④7 高柳遺跡
⑩ 朴沢文書	②9 堂庭興寺宝塔跡	④8 泉民俗資料館
⑪ 朴沢系図	③0 松森焰硝蔵跡	④9 山の寺伝説
⑫ 磯田家文書	③1 三十三所観音	⑤0 白藤観音伝説
⑬ 住吉遺跡から出土した旧石器	③2 ミズバシヨ	⑤1 万人淵伝説
⑭ 長命館跡の出土品	③3 イロハモミジ	⑤2 石留明神伝説
⑮ 弘安の碑	③4 アラカシ	⑤3 金玉神社伝説
⑯ 永仁の碑	③5 タラヨウ	⑤4 狼石伝説
⑰ 蔵経遺碑	③6 神 杉	⑤5 根白石の石伝説
⑱ 雲居和尚座禅堂跡の碑	③7 泉ヶ岳胎内くぐり	
⑲ 上谷川鹿踊・剣舞	③8 猿 岩	



泉地域略年表

旧石器	~B.C.8,000 B.C.8,000~	旧石器文化はじまる 長岫遺跡に前期旧石器人が住みつく
縄文		縄文文化はじまる 朴沢地区に大集落が営まれる 上鳥井原遺跡(前・中期)・畑中遺跡(後期)・西小屋遺跡(晩期)
弥生	~B.C.300 A.D.300	稲作はじまる
古墳	4~5 C	県内に方形周溝墓つくられる 仙台市遠見塚古墳・名取市雷神山古墳つくられる
奈良	710 724 780	平城京に都をうつす 多賀城をおく 伊治公咎麻呂(いじのきみあざまろ)の乱により多賀城焼かれる
平安	794 10C 1051~62 1083~87	平安京に都をうつす このころ堂庭山に宝塔がつくられる 前九年の役 後三年の役
鎌倉	1189 1285 1287 1294 1333	源頼朝藤原氏を滅ぼす 国分氏・大河戸氏が泉地域に所領を得る このころ木像阿弥陀如来立像がつくられる 弘安の板碑つくられる 大河戸氏に山村(泉地域西部)の地頭職が安堵される 永仁の板碑がつくられる
南北朝	1337 1350 1351 1352	大河戸氏、新田義貞の軍に加わり鎌倉攻めに参加する 鎌倉幕府が滅び、建武政権が誕生する 北畠顕家、多賀国府に下向する 南北朝の対立がはじまり、泉地域が南朝の拠点となる。 観応の擾乱はじまる
戦国	16C 1506 1518 1549 1584 1594 1596 1600 1604	岩切城の合戦、国分氏が勢力を拡大させる 南朝方の拠点、小曾沼城・市名坂城・山村城陥落し、泉地域の南朝方は一掃される。 このころから国分氏と留守氏の対立が激しくなる 国分之勇者長命別当が留守領に攻め込む 洞雲寺に銅鐘が寄進される 国分勇者長命別当弟広谷熊太郎が留守領に攻め込む 須藤刑部、結城七郎によって滅ぼされる 裁松院没す 国分氏没落する 関ヶ原の合戦、伊達政宗仙台城の縄張りを始める 鷲倉神社建立される
江戸	1658 1673 1680 1692 1696 1717 1732 1746 1833	古内主膳没す 古内志摩没す 蔵経壇碑建立される 内藤以貴没す 下賀茂神社遷宮 このころ松森焔硝蔵つくられる 雲居和尚座禅堂跡碑建立される 洞雲寺に殿鐘寄進される 河南堂・河北堂建立される このころ三十三所観音がまつられる
明治	1868 1884 1897	明治維新 市町村制施行、泉嶽村(4,793人)、七北田村(4,741人)誕生する。 泉嶽村を根白石村と改称する
大正	1922	仙台から吉岡まで軌道車が開通する
昭和	1955 1971 1988	根白石村(7,102人)と七北田村(6,939人)が合併し泉村となる 泉市(37,861人)となる 3月1日仙台市と合併する

メモ

